復興一番船　（小林茂光・六期生）

島根県練習船「神海丸」の事

去る三月十六日、神奈川県三浦市三崎港岸壁に於いて島根県大型水産練習船「神海丸（六九九トン）の模型船の贈呈式が挙行された。精巧な模型船は全長一・三六メートル、五十分の一縮尺、建造にまつわる、島根県と大水害被災三県の或る美談の報道を見て感激された東京都瑞穂町在住の塚田三与志さんが作成し寄贈して下さった。

二〇一二年十一月に宮城県石巻市ヤマニ造船で進水した東日本大震災復興一番船である。図面も出来上がり建造に着手しようとしたその矢先にあの大津波が押し寄せた。

造船所は壊滅し、跡片付けと造船設備の復旧には多くの時と金と人を要したが、その間島根県は辛抱強く復旧を待ち、励まし続け、更に被災三県の岩手、宮城、福島の県旗の色である青・緑・橙の三色を船体ラインに使わせて戴いた。つまり、島根県の県旗色エンジの色で船首部分に県の魚「トビウオ」が勢い良く跳ねる姿を表現し、続く船体ラインを三県の旗の色が引き継いで船体を一周するデザインとした。

このデザインは隠岐・浜田両水産高校の生徒と職員の発案に基づくものという。

この四県の絆の話と復興一番船のテレビ報道に塚田さんは感銘を受けて製作、三崎港での寄贈となった、またこの船に決めたもう一つの理由に、塚田夫人がイメージキャラクター「しまねっこ」のかわいさに惚れ込んで強く推された事と云う。

贈呈式の後、練習船を見学させていただいた。

船内はＩＴ化が進められ操舵室やエンジンのコントロールルームは勿論、実習生もすべて一台コンピューターを所有し授業にもプライベートにも活用していた。六十年前に学生生活を送った筆者には驚きの連続だった。

実習での漁獲物のマグロやイカは零下五十五度の急速凍結室・準備室・保冷艙の装置もあった。

何より、船籍港が島根県松江市と船尾に明記されている事に限りない慶びを感じた。この日で下船した両校の生徒はハワイのお土産を詰め込んだ大きな箱と一緒に故郷へ向かって行った。

この、神海丸三崎港入港と模型船贈呈式のニュースは東京だんだん会最年長で松高二期石原道央さんからもたらされた。石原さんが勤務されておられた日本鋼管の後輩に、模型船の同好の皆さんが作る協会の会長がおられ、石原さんが島根県の御出身で有る事を知っておられたことから、直接連絡を戴いたとの事だった。

ニュースを受けた石原さんは同船の入港日も迫っており、入港地に近い神奈川地区メンバーと隠岐関係者など、練習船に関係のあると思われる限られたメンバーに通知されて、当日六人が京浜急行三崎口駅に集合して神海丸を訪問した。

島根県の職員で神海丸の運航を担当なさっておられる酒井主事他からご説明戴いた。

筆者の卒業した大学には海鷹丸と云う練習船があり、今から六十年も前の事となるが第一次南極探検に派遣される宗谷の随伴船として南氷洋へ同行した事があった。当時の最新鋭の練習船もコンピューターは普及しておらず、ＩＴ化に関しては全く足元にも及ばなかったと思う。

接岸中の神海丸

左ＩＴ化された操舵室
上は自動操舵の航路設定

本船乗員、両校実習生、県職員整列し、
模型船の贈呈式

模型船を囲んで記念撮影の一行